

第2 言語学習から見た Communicative Competence

—構成部門と初期段階の目標—

兵庫教育大学 山岡 俊比古

1. はじめに

第2言語の教授・学習を研究対象とする我々の分野において、Communicative Competenceの確認とその育成は、我々が取り組むべき大きな研究課題として広く認識されている。文法的知識が偏重されてきた歴史への反省も含めて、現在ではこのCommunicative Competenceの養成が最も重要な教授目標であるとされている。Communicative Competenceの構成部門もいくつか確認されている。しかし、この能力に関するこれまでの議論は、第2言語を教室で学び、教室外ではその言語に触れる機会の無い学習者の視点からすれば、十分でない部分があると思われる。このようなタイプの言語習得を第2言語学習と呼ぶことにし、以下ではこの能力の根元的発想とその展開を概観し、第2言語学習の視点から生じる問題点を論じ、特に、このようなタイプの学習の初期段階における目標としてふさわしいCommunicative Competenceとは何かを分析的に明らかにする。

2. Communicative Competenceの根元的発想

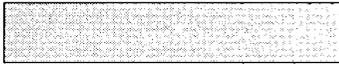
言うまでもなく、Communicative Competenceという概念は、Chomsky (1965) が唱えた言語能力 (Linguistic Competence) と言語運用 (Linguistic Performance) の識別に端を発し、この2分法の不十分な点を補う形で提唱されたものである。Chomsky は理想的な言語使用者の言語知識を言語能力と呼び、言語運用を「数多くの間違っただけの言い出し、規則からの逸脱、発話中における計画変更など」(1965: 4) の言語知識とは関係しない諸要素が混入する現実の言語使用として規定し、この両者を区別した。このような2分法に対し、Hymes (1971, 1972) は言語の正しい運用を支えているものは言語的知識だけではないことを指摘し、「通常において子供は、文法的なものとしての文の知識だけではなく、適切なものとしての文の知識をも習得する。子供は、いつ話すべきで、いつ話すべきではないかとか、誰と何についていつどこでどんなふうに話すべきであるかということに関わる能力を習得する」(1971: 269-93) という事実を明らかにした。つまり、彼は言語使用者にとって必要なものは文法的な知識だけではなく、「話すことの規則」(1971: 15) も必要であるとし、これは「それが無ければ文法規則が価値を失ってしまう使用の規則」(1972: 278) であると述べる。そして、このような使用の規則も含めた言語使用者の能力をCommunicative Competenceと名付けたのである。Hymesの指摘の本質はTaylor (1988: 154) の次のことばに端的に表されている。

Hymes is saying that some aspects of what Chomsky lumps together under performance are systematic, can hence be described in the form of rules, and can thus be seen as a form of competence.

以上のことを図式的に示すと図1のようになる。

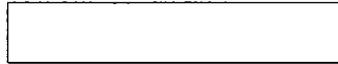
Chomsky (1965)

Linguistic Competence



(the speaker-hearer's
knowledge of the language)

Linguistic Performance



(the actual use of language
in concrete situations)

Hymes (1972)

Linguistic Competence



Linguistic Performance



[rules of use without which the rules
of grammar would be useless]

Communicative Competence

図1 Communicative Competence の基本概念

3. Communicative Competence の展開

この概念が提案されて以来、より一般的な把握の中で、円滑なコミュニケーションを支えている能力としての Communicative Competence の実体の分析が盛んに行われてきた。Hymes が Communicative Competence として言語能力に加えたものは、発話の「適切性」に絡む規則であり、これはもう少し一般的な用語で表せば、社会言語的な能力を構成するものである。しかし、Chomsky が言語運用としてまとめたものの中に Hymes が指摘した能力以外にも、それがなくては現実の場面において円滑なコミュニケーションが阻害されるというものを確認することができる。しかも、このような要因は、コミュニケーションを支える知識的なものとして言語使用者の内部に存在しているから、これを Communicative Competence の構成部門として位置づけることができる。以上のような認識のもとに Communicative Competence の構成部門としていくつかのものが確認されている。

例えば、Canale and Swain (1980) および Canale (1983) は、Communicative Competence の構成部門として文法的能力、社会言語的能力、談話能力、方略能力を取り上げる。また、Savignon (1972 : 9, 1833 : 44) はパラ言語的能力を1つの構成部門として認識している。さらに、Hammerly (1983, 1985) は、文化的能力の重要性を指摘している⁽¹⁾。以上の構成部門を、それぞれ簡単な定義も添えて以下にまとめて示す。

Grammatical Competence : Chomsky の言う Linguistic Competence と同じもので、主に文のレベルにおける文法的な知識

Sociolinguistic Competence : Hymes が特に強調するもので、具体的場面の中での発話の適切性に関わる知識

Discourse Competence : 個別的な文のレベルを越えて、まとまりを持った一連の発話を構成することに関わる知識

Paralinguistic Competence : Savignon が特に強調するもので、発話に付随するジェスチャーとか顔の表情や、対話者が保つ距離などが持つ意味についての知識

Cultural Competence : 発話の理解に必要な文化的背景についての知識

Strategic Competence : 一時的なものであれ、体系的な欠陥であれ、文法的な能力の足りない部分を暫定的に補うための知識で、言い替えとか迂言などを行う知識

4. 第2言語学習からみた Communicative Competence

Communicative Competence の概念は、特に第2言語の教授・学習に関わる議論の中で取り上げられることが多い。上で概観した構成部門はすべてこの視点から分析されたものである。この視点に立つ分析について留意すべきことは、この概念がそれまでの第2言語教授の実践とその結果との関連で把握されていることである。Communicative Competence の概念が新しく提案された時期と、第2言語教授におけるいわゆる Audiolingualism が理論的にも実践的に行き詰まりを示した時期とがほぼ一致していることに注目すべきである。このことを認識するならば、Audiolingualism が結局成し得なかったものは何であったかということに対する反省と、本来的に Communicative Competence の概念が持つ指向性からして、この用語が「audiolingualism が成し得なかったすべてのものを象徴する用語」(Savignon 1983: 1) として使われるようになったのはある意味において当然のことであったといえる。このことは、例えば、Communicative Competence の概念を 'spontaneous expression' の能力と同一のものとしてとらえる Rivers (1973) において見られるものである。(このような傾向に関してのより詳細な議論については、山岡 (1978) を参照のこと。)

第2言語教授の分野からなされた Communicative Competence の議論に付随的に出てくるもう1つの特徴として、この能力を実際の場面において円滑なコミュニケーションを行うための技能 (skills) ないしは力 (ability) と同一視することがあげられる。このことも、上で述べた事情からすれば当然のことと見ることができる。既に確認した Communicative Competence の構成部門の分析は、すべてこの見方に立ったものである。例えば、Savignon (1972: 8) は、「Communicative Competence は真にコミュニケーション的な場面において機能するための力と定義できる」と述べ、Corder (1973: 197) も「言語教授の目的と目標は、学習者に異なった言語が使用される生活共同体の中で一定の役割を果たすことができるように知識と技能を身につけさせることである」とし、これを Communicative Competence と呼んでいる。この分野の一般的な認識の仕方として、次の McLaughlin (1985: 219) の指摘が参考になる。

Subsequently [after Dell Hymes], different authors have interpreted the concept [Communicative Competence] in different ways, but most see it as referring to mastery of skills needed to use language appropriately during social intercourse of various sorts.

Communicative Competence を実際の技能とか力と同一視するこのような一般的傾向に対して Taylor (1988) は批判を加える。彼は、能力 (competence) の概念を Chomsky における用法までさかのぼり、これをあくまで潜在的な意味での知識であるとし、実際の技能とは直接的には関係しないものであるとする。Taylor のこの指摘は的確なものであると認識しなければならない。Chomsky (Chomsky 1975, cited in Taylor 1988: 152) が述べるように、原理的に言って、ある言語の十分に発達した潜在的知識を持ちながらもこれを使用する力は持ち合わせていない場合と、逆に、表面的に使用と見られるものがあつたとしても、これが潜在的知識によるものではなく、単なる性癖とか習慣に基づくものである場合がある。確かにこの潜在的知識と実際の技能の識別は、微妙ではあるがなされて当然のものであろう。しかし、Chomsky 自身が同時に述べるように、最も一般的には、言語の潜在的知識があつて言語使用が生じるのであるか

ら、第2言語の教授の立場からして、能力を技能と同等視することは、致命的な間違いとは思われない。しかし、十分に考察を加えなければならないのは、Chomskyの言う潜在的言語知識としての言語的能力と、具体的な言語使用技能との関連である。より厳密に言えば、言語的能力が何らかの直接的な方法で言語技能に関与するのか、あるいはしないのかという点について議論しなければならない。このことについては、言語規則の心理的実在性を扱う次の節で詳しく考察する。

以上の議論を踏まえて、以下では教室で第2言語を学習している学習者が現実のコミュニケーション場面において直面しやすい状況を説明し、このことをCommunicative Competenceの構成部門として提示されている各能力との関連で議論していく。教室外では第2言語に触れることのない教室の学習者のほとんどが体験する問題点は、教室の中での構造練習はうまく行うことができるのに、実際のコミュニケーション場面では何も言えないという事態に直面することである。これには様々な原因が考えられる。さらに、そもそも話すべきふさわしい話題が見つからないとか、その言語における会話の切り出し方が分からないなどの会話の定式の心得がない場合も考えられる。しかし、このような要因が排除されたとしても、依然として本格的なコミュニケーションはおろか、1つの発話すらできないという状況が生じると考えることができる。

さらに、Communicative Competenceの1部門として社会言語的能力を構成する対人的・場面的な意味での発話の適切性は強く要求されず、教室で学ぶ一般的に丁寧な表現が許され、普遍的な人間の言語能力としての談話能力を越えた、その言語特有の談話的知識が要求されるようなレベルの高い対話ではなく、特に決定的となるパラ言語的能力も必要とされず、その言語の文化的能力が特に必須となるような話題ではなく、文化的に中立的な事柄について話そうとする場合で、加えて、コミュニケーションがうまく行かない時にこれを埋め合わせるための言語的・非言語的な方略を動員する能力が必要となる以前の段階でのコミュニケーションであるとしても、依然としてコミュニケーションがなかなか成立しない状況を考えることができる。しかも、このような状況は第2言語学習においてはありふれたものである。

このような特徴を持ったコミュニケーション場面に出会うのは、初期段階の学習者において最も多いであろうし、上で述べたような事態に陥るのも初期段階の学習者の典型であるとみることができる。従って、初期段階の学習者がこのような事態に直面する原因は、従来からCommunicative Competenceの構成部門として確認されているいくつかの能力のどれかに欠けているためとは考えにくい。発話の適切性であるとか、当該言語の談話能力やパラ言語的能力とか文化的能力が必要となり、さらに、方略的な能力の稼働が求められるようになるタイプのコミュニケーションは、ある程度レベルの高い種類のものである。Communicative Competenceを構成するとされるこのような各種の能力が特に必要とされない初歩的な場面でも、依然としてコミュニケーションがはかどらない状況が生じるのであれば、Communicative Competenceの中にこれまでに確認されていない能力があり、この能力が欠けているためであると判断せざるを得ない。以下で、このことについての議論を進める。

5. Psycholinguistic Competence

上で述べたような教室の学習者が直面しやすい事態、つまり、教室で行う構造練習はうまくやることができるのに、現実の場面の中ではコミュニケーションはおろか1つの発話すらできないという状況に関して、まず指摘すべきことは、このような学習者はそれなりの文法的能力（あるいは言語的能力）を所持していることである。このことは、このような学習者は構造練習をこなすことができる点に明確に現れている。おそらく、彼らは構造練習だけでなく、文の文法性の判

断や多義文の解釈なども正しく行い能力を持っているものと考えられる。

このような能力は、Chomsky の言う言語的能力に該当するものである。しかし、この能力は現実の発話を導くものとしては機能しないことに注意すべきである。これは、いわゆる文法規則の心理言語的実在性に関わる問題である。上述した学習者がまともな発話すらできないのは、彼らの所有する言語的知識が発話の内的過程を実際に導くという意味での心理言語的実在性を持っていないことの表れであるといえる。理論的にみても、抽象化され定式化された知識の体系としての言語的能力と、言語使用者が実際に依拠する知識の体系とは区別されるべきものである。例えば、Widdowson (1983: 23) は、言語学者のような分析家の言語モデルと現実の使用者の言語モデルを区別して次のように述べている。

... That is to say, competence, whether linguistic or communicative, refers to those aspects of human language behavior that can be formalized in a model of description. In Chomsky's original formulation, for example, competence is defined as a knowledge of sentences possessed by an ideal speaker / listener in a homogeneous speech community. ... It does not follow at all that this analysis corresponds to any reality in the minds of the language users themselves. ... Competence refers to what the grammarian for methodological reasons *represents* as language knowledge: it does not refer to the language user's mode of knowing.

以上のことを、文 (sentence) と発話 (utterance) という区別から見直してみると、文は言語的能力に関わるもので、発話は言語運用に関わるものとなる (Klima 1971)。例えば、図2に示すように意味・概念を言語符号化する過程と、その結果としてでき上がるものを区別することができる。

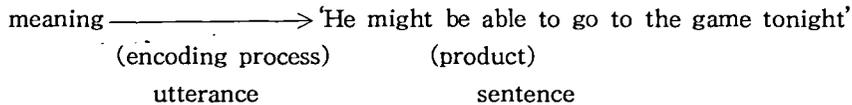


図2 発話と文の過程的な違い

言語的能力の視点から分析の対象となるのは文のレベルであり、ここでの分析は、例えば、(pronoun + auxiliary + verb of being + adjective + infinitive + prepositional phrase + adverb) とか (noun phrase + verb phrase) ということになる。これに対し、意味・概念の符号化の過程という実在の心理言語的観点からすれば、これは (potentiality + capability + futurity + agent + locomotion + time) という問題となる (Brown 1987: 152)。

このように見てくると、言語を使用する能力の一部として、言語的能力とは別個の能力を想定しなくてはならないことになる。これは、現実の言語使用としての発話の過程を直接的に導く心理的に実在する言語知識としての能力である。同様の認識が Garrett (1986) によってもなされている。彼女は、母語話者の直観によって立証される抽象的な体系としての文法的知識は、実際の表出とか理解を行う際に使用される規則ではないとし、後者の規則を 'processing rules' と名付けた上で、次のように述べている (Garrett 1986: 139)。

If meaning is to be communicated among speaker-hearers they must follow shared "rules" for the encoding and decoding of utterances. These shared rules are processing rules; they describe the processing that mediates in either direction between meaning and utterance. These rules constitute "grammar" as defined by psycholinguistics, which is concerned not only with the nature of language but with how it is acquired and used.

言語的能力とは異なり、現実の発話や理解を直接的に導くこのような能力を心理言語的能力 (psycholinguistic competence) と名付けることにする。明らかに、この心理言語的能力は Communicative Competence の構成部門の1つとして位置づけるべきものである。しかもこの能力は Communicative Competence の中核部分を占めるものとして明確に認識すべきであり、上記した第2言語学習者が教室外でのコミュニケーション場面において直面する事態の説明を可能にするものである。

これまで、この能力が Communicative Competence の一部として明確に認識されてこなかったことは理由の無いことではない。Chomsky を初めとする言語学者が分析の対象として中心的に取り上げるのは、成人の母語話者である。成人の母語話者の場合には、その言語の言語的能力の所持はほぼ自動的に心理言語的能力の所持を含意する。つまり、母語習得においては、言語的直観に代表されるメタ言語的知識としての言語的能力は、その言語を実際に使いこなす能力の後から発達するものである。従って、彼らの場合、言語的能力は心理言語的能力を持つことの1つの証として現れてくるという関係が生じる。これに対し、第2言語学習者の場合には、このような含意関係が必ずしも成立しない。特に、形式的な教授を受ける学習者においては、目標言語の言語的知識は習得できても、心理言語的知識が身につけていないことが頻繁に起こる。ここに見逃しがちな問題が存在するのである。

これまでの議論をまとめると、Communicative Competence の構成部門として既に確認されている6つの能力に新たに心理言語的能力を加えるべきであり、特にこのことは教室における第2言語学習を考える際に必須となる。以下では、このようなタイプの学習者の学習初期段階において、Communicative Competence をどのように捉えるべきであるかという点に論を移す。

6. Communicative Competence と学習初期段階の目標

教室を離れるとその言語に触れる機会のない第2言語学習者が、学習の初期段階において目標とすべき Communicative Competence はどのようなものであろうか。これに答えるために、まず最初に、Communicative Competence の養成に関わる実践的な先行研究を2つ概観して考察を加える。いずれも学習初期段階に焦点を合わせたものであるが、1つはこの能力の養成に積極的に取り組んだもので、もう1つはこの能力を初期段階の目標から除こうとするものである。

Savignon (1972) は「外国語の教師は長年にわたって、言語の仕組み (mechanics) を習得してもその言語をコミュニケーションのために使う力 (ability) を保証することにはならないということを知っている」という基本的認識に立ち、欠けているのは Communicative Competence であるとして、その養成のために学習者に「実際的なコミュニケーション場面においてフランス語を使う機会」を与え、「意味を伝達することを様々な現実の状況やそれを模した状況の中で行う」ということを主眼にした活動を行わせた。あとで行われたこの能力の測定は、伝達された情報量、理解のしやすさ、流暢さ、自然な休止、伝達しようとする努力、対話を自ら始めたり終える能力という各視点から行われた。結果は学習の初期段階からこの Communicative Competence

の養成が可能であるとするものであった。Savignon (1983) は、Communicative Competence の構成部門として文法的能力、社会言語的能力、談話能力、方略能力をあげ、これにパラ言語的能力を加えて議論している。しかし、上で述べた実践とその評価において一貫して強調されているのは、明らかに、意味を伝達することであり、取り立てて社会言語的能力とか談話能力とか方略能力とかパラ言語能力を強調するものではない。これは、初期段階の学習者にとっての Communicative Competence であるということからすれば、当然のことと言えるかもしれない。しかし、このことは十分に注意すべきことである。つまり、彼女が実践結果の測定において、Communicative Competence が身についたという時、その構成部門として具体的にどの能力が身についたのかを彼女自身が明確にしなければならない。この実践研究をまとめれば、学習の初期段階であり、その言語特有の社会言語的能力、談話能力、方略能力、パラ言語的能力がさして問題とならないところで、意味を伝達できる能力として Communicative Competence が養成されたという結論となるが、このことの吟味を彼女は怠っている。このような学習者は、既に「言語の仕組み」を習得しているのであるから、Chomsky に由来する厳密な意味での言語的能力は所持しているといえる。従って、彼らはここであげた Communicative Competence の5つの構成部門が大きく関与しない部分でこの能力を身につけたことになる。その具体的な現れが「意味を伝達できること」であるという点にもう一度注意しなければならない。

問題は、まずこの分野の理論家の例に漏れず Savignon が、本来的に潜在的な知識であり具体的技能とは区別されるべき Communicative Competence の概念を無識別的にとらえている点にあると思われる。しかし、より根本的には、抽象的な知識の体系としての能力と、意味・概念の符号化や復号化を直接的に導く心理言語的な知識としての体系とを識別していないところに問題が潜んでいると考えることができる。このような心理言語的な能力を言語的な能力と識別して想定すれば、彼女の実践を受けた学習者の結果をきわめて合理的に説明できる。つまり、彼女の実践においては、彼女の Communicative Competence の把握とその構成部門の認識にも関わらず、学習者が身につけたのは、彼女がその構成部門として確認していない心理言語的能力であったということになる。

Prabhu (1987: 1) は、インドにおけるバンガロールプロジェクト (Bangalore Project) の根本的動機とその特徴を次のように述べている⁽²⁾。

The stimulus for the project was a strongly-felt pedagogic intuition, arising from experience generally but made concrete in the course of professional debate in India. This was that the development of competence in a second language requires not systematization of language inputs or maximization of planned practice, but rather the creation of conditions in which learners engage in an effort to cope with communication... In the context of the project, competence in a language was seen as consisting primarily of an ability to conform automatically to grammatical norms, and communication as a matter of understanding, arriving at, or conveying meaning. The focus of the project was not, that is to say, on 'communicative competence' (in the restricted sense of achieving social or situational appropriacy, as distinct from grammatical conformity) but rather on grammatical competence itself, which was hypothesized to develop in the course of meaning-focused activity.

ここでまず注目すべき特徴は、教授目標が Communicative Competence ではなく、文法的

能力に置かれていることである。これは、「自然な言語使用は文法的能力以上のものを含んでいるという議論」は「十分に説得的なものである」が、「従って言語教授はこのような付加的な能力に取り組みなければならない」という議論は「あまり説得的ではない」(Prabhu 1987: 13)というきわめて冷静でかつ健全な認識を基にしている。発話の適切性という意味での Communicative Competence は、少なくとも、学習初期段階での目標とはならないとする判断は大切なものであると考える。次に注意すべきことは、「文法的能力」という用語で表されている意味である。この語は本来的には、あくまで実際の言語使用から離れた抽象的な存在としての言語知識を意味すべきものであるが、上の引用文においては、意味の伝達という実際的な言語使用とも関連づけて使用されている。つまり、ここで意図されている文法的能力は、意味に焦点を当てた活動を行う中で発達するものと把握されているのである。従って、この能力がその本来的な意味に加えて、言語の実際の使用を導くための能力も意味していることになる。これは私がこの小論で定義した心理言語的能力に該当するものである。つまり、このプロジェクトでは、教授目標として心理言語的能力を設定するが、それ以上の Communicative Competence は取り扱わないという判断が行われているということができる。

2つの実践に共通してみられる特徴は、学習の初期段階において達成された、あるいはその目標として設定された Communicative Competence がかなり限定的なものであるという点である。Savignon の実践においては、彼女の Communicative Competence の把握にも関わらず、その能力の達成を目指した活動とその結果から見れば、学習者が身につけたのは主に心理言語的能力であると言える。Prabhu の場合には、最初からその目標が限定化されており、心理言語的能力を内包する「文法的能力」の習得を目指している。いずれの実践においても、学習者が取り組んだ活動は「意味の伝達をはかる活動」とか「意味に焦点を当てた活動」であり、共通して、できる限り真のコミュニケーション場面を与えることによって学習者に意味・概念の言語符号化と復号化を体験させるものである。

7. 結 論

Communicative Competence という語だけでなく、言語的能力 (Linguistic Competence) という用語までもが使用者によって異なった意味に用いられているという問題がある。しかし、現実の言語の使用の内的過程、つまり、意味・概念の言語符号化と復号化を直接的に導く規則の知識という意味での心理言語的能力の存在を認識し、これを抽象的な存在としての言語的知識と識別することが大切である。このことにより、いわゆる Communicative Competence の構成部門として、言語的能力、心理言語的能力、社会言語的能力、談話能力、パラ言語的能力、文化的能力、方略能力を認めれば、第2言語学習者の示す様々な学習状況をより合理的に説明できる。

第2言語学習の初期段階において、一応の言語的知識は持っているのに実際の場面でコミュニケーションができないというごく一般的な現象の原因は、これまで社会言語的能力、談話能力、方略能力などを意図した一般的に言われるところの Communicative Competence の能力に欠けているからであると説明されてきた。しかし、初期段階の学習者に期待されるコミュニケーションは、特にその言語特有の社会言語的能力とか談話能力などが必要となる高度なコミュニケーションではないことを考え合わせなければならない。これに従えば、このような学習者が直面している事態の原因は、言語使用に際して内的に作用すべき心理言語的能力が身につけていないからであると考えるのが妥当となる。

もっとも、いかに初期段階のコミュニケーションといえどもそれが自然なコミュニケーションである限り、会話のルールとか基本的な談話レベルなどの問題が絡んでくることは想像に難くない

い。しかし、これらのものは普遍的な言語の能力の一部であると考えられ、学習者が自分の母語を習得しているかぎり既に保証されているものであろうから、取り立てて教授目標とするような性質のものではないと思われる。

以上の議論から、結論として次のことを主張することができる。第2言語学習の学習初期段階においては、Communicative Competenceの観点から意図的に学習を導かなければならないのは心理言語的能力であり、これはつまるところ、学習者に初期段階からできる限り自然なコミュニケーション活動をやらせ、意味・概念の言語符号化と復号化の過程を体験させることである。

既に述べたように、これまでは従来のCommunicative Competenceの把握に基づいて、この概念が内包する社会言語的能力とか談話能力などを特に強調することが行われてきた。このような一般的傾向の典型として、伊東（1987：56）をあげることができる。彼は次のように主張する。

... このモデル（Communicative Competenceモデル）は、われわれ英語教師が自らの仕事の大きさを再認識し、その視野を拡大していくことの必要性を鮮明に示してくれている。英語の文法さえ知っていれば、実際場面で英語を使える能力は自然に備わってくるという希望観測の下、英語のGrammatical Competenceの養成だけ専念することは、もはやできなくなっている「言語体系の知識だけでは適切な言語行動を取りにくいこと」（国広1974：156）を十分肝に銘じる必要がある。

このような従来の主張に対して、この小論の結論として次のような主張を提示する。

この小論で行ったCommunicative Competenceの考察から、われわれ英語教師が自らの仕事の肝要な部分は何であるかを十分に焦点化し、拡大されている視野を整理し、初期段階において必要な部分へと集中することの必要性が明らかとなってくる。英語のGrammatical Competenceだけでは、実際の場面で英語が使える能力は自然に備わってはこないという経験を踏まえ、「言語体系の知識だけでは適切な言語行動を取りにくいこと」（国広1974：156）の真の原因を、初期段階における問題として十分に分析する必要がある。

注

- (1) Hammerly は第2言語学習者が目標とすべき能力を‘second language competence’と大枠でとらえ、その構成部門としてLinguistic CompetenceとCommunicative CompetenceとCultural Competenceを設定している。しかし、それぞれの定義からすれば、彼の言う文化的能力を我々の議論におけるCommunicative Competenceの一部として位置づけることが可能である。
- (2) インドでは英語が公用語として使われている点で、日本のような第2言語学習と異なっている。しかし、インドでの英語学習が、例えば米国において英語を学ぶ場合と同じように一般的社会生活の中で英語に触れることができるのか否かについては疑問が残る。

参考文献

Brown, H.D. (1987) *Principles of Language Learning and Teaching*. Second Edition. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.

- Canale, M. (1983) 'From communicative competence to communicative language pedagogy' in J.C. Richards and R.W. Schmidt (eds.): *Language and Communication*. London: Longman. 2-27.
- Canale, M. and M. Swain (1980) 'Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing' *Applied Linguistics* 1: 1-47.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Chomsky, N. (1975) *Reflections on Language*. New York: Pantheon.
- Corder, S.Pit (1973) *Introducing Applied Linguistics*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin.
- Garrett, N. (1986) 'The problem with grammar: What kind can the language learner use?' *Modern Language Journal* 70: 133-148.
- Hammerly, H. (1982) *Synthesis in Second Language Teaching: An Introduction to Linguistics*. Blaine, Wash.: Second Language Publications.
- Hammerly, H. (1985) *An Integrated Theory of Language Teaching*. Blaine, Wash.: Second Language Publications.
- Hymes, D. (1971) 'Competence and performance in linguistic theory' in R. Huxley and E. Ingram (eds.) *Language Acquisition: Models and Methods*. London: Academic Press. 3-24.
- Hymes, D. (1972) 'On communicative competence' in J.B. Pride and J. Holmes (eds.): *Sociolinguistics*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin. 269-292.
- 伊東治己 (1987) 「Communicative Competence 再考 -framework 論から model 論へ-」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第36集, 41-59.
- Klima, E.S. (1971) 'Discussion to "Competence and performance in linguistic theory" by D. Hymes' in R. Huxley and E. Ingram (eds.): *Language Acquisition: Models and Methods*. London: Academic Press. 24-28.
- 国広哲弥 (1974) 「社会のなかの言語」『現代のエスプリ』No. 85, 155-69.
- Mclaughlin, B. (1985) *Second Language Acquisition in Childhood: Volume 2. School Age Children*. Second Edition. Hillsale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Prabhu, N.S. (1987) *Second Language Pedagogy*. Oxford: Oxford University Press.
- Rivers, W.M. (1973) 'From linguistic competence to communicative competence' *TESOL Quarterly* 7: 25-34.
- Savignon, S.J. (1972) *Communicative Competence: An Experiment in Foreign-Language Teaching*. Philadelphia, Pa.: The Center for Curriculum Development.
- Savignon, S.J. (1983) *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice: Text and Context in Second Language Learning*. Reading, Mass.: Addison-Wesley.
- Taylor, D. (1988) 'The meaning and use of the term 'Competence' in linguistics and applied linguistics' *Applied Linguistics* 9: 148-168.
- Widdowson, H.G. (1983) *Learning Purpose and Language Use*. Oxford: Oxford University Press.
- 山岡俊比古 (1978) 「Communicative Competence と TEFL」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 8. 29-32.